修訂 新撰國語讀本

佐々政一編

巻七

3759
Sa19
資料室

41505
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
1536

資料室

大正七年一月十六日
文部省檢定濟
中學校國語科用

375.9
S219

文學博士佐々政一編

修訂 新撰國語讀本

株式會社明治書院

廣島大学
教
38324
図書

修訂新撰國語讀本卷七目次

一 我が國語……一
二 百花譜……七
三 落花……一一
四 新古今集抄……一三
五 方丈記抄上……一七
六 方丈記抄下……二二
七 鎌倉時代の文學……二五
八 大原御幸……三〇

九　晩春の別離……三九
一〇　新綠……四三
一一　綠蔭清話……四八
一二　海と日本文學　上……五三
一三　海と日本文學　下……五九
一四　奥の細道……六五
　一　出立……六五
　二　松島……六六
　三　平泉……六七
一五　妹にさとす　上……六八
一六　妹にさとす　下……七四

一七　感化の力……八〇
一八　猛虎の説……八四
一九　七騎落　上……九三
二〇　七騎落　下……九八
二一　兼平最期……一〇二
二二　先帝御入水……一〇六
二三　平家雜感……一一三
　一　都落……一一三
　二　清盛入道……一一六
二四　川柳點……一二二
二五　清林和尚……一二四

二六　長柄隄の訣別……………………………………一二八

修訂新撰國語讀本卷七目次終

修訂新撰國語讀本卷七

一　我が國語

敷島のやまとの國は、言靈の
たすくる國ぞ、まさきくありこそ。

歌聖人麿が此の一首は、傳説的に、深く、我が國民に國語を尊重する心を起させて來たものであるが、今やわが帝國が世界の一等國として東洋に雄飛する時勢に遭逢して、益、我が國語の繁榮を願ふ情が涌き來るのは當然の事であらう。

一國語がその國家の勢力の上に大關係のある事は、今更に言ふまでもない。試にかの英國を見よ。その海軍、その航海業、その商工業のみならず、その言語・文學は世界に大勢力をもつて居る。世界の通商貿易は過半、英語を以て行はれてゐる、文明國の都市には英文學を研究してゐないところはない。ただその言語・文學の勢力だけを觀ても、英國の偉大を感ぜざるを得ぬではないか。

嘗て或所で支那の留學生と行きあつたことがある。彼等は日本語を話し、日本服をつけ、日本料理をたべて居た。自分は暫くは彼等が支那人であることに氣づかなかつた。ところが彼等は、我が國の大家が漢文學中の一句を書いた額を見て、「これも支那のお蔭だ」とささやいた。そのささやきを聞いて、自分は深い感慨にうたれざるを得なかつた。彼等は日本人に賞美せられてゐる自國の古文學を眼前に見て、その祖國が他の國民に及ぼした勢力を自覺し、直に自尊心を起し來つたのである。これは尤もな事である。歐米の好事家が日本服を著てゐるのを見てさへも、何となく我等は好い心持がする。況や他國の大家の精神に刻まれた、祖國の文物の勢力を觀れば、實に多大の自尊心を起すべき筈である。顧みれば、我が國に支那の古文學を傳へたのは隨分古い事であるのに、その古文學は偉大な勢力を我が國に存續して、故國の勢力は衰退しても、文學の力は依然として日本人の頭腦

の一部を支配してゐる。我等は言語・文學の影響が強大で長久であることを認め、かつ正直に、いはゆる「おかげ」を謝せざるを得ぬ。

「おかげ」を謝するとともに、我等は何時までも他國の「おかげ」を蒙つてゐることに滿足することは出來ぬ。我等は我が國語の勢力を擴大して、他國民に「おかげ」を蒙らせねばならぬ。凡そ自國語を尊ぶことは、何人も主觀的に然らざるを得ぬ、自國語を尊ばないものは愛國者でない。然るに幸にして我が國語は、之を客觀的に見ても、已に世界において重んずべき資格を持つてゐることが認められる。

世界の諸語族の中で最も重なものは、印度語や西洋諸國

(一) Ural-Altaic.
(二) Finland.（露の北西隅）
(三) Hungary.

語などの屬する印度歐羅巴語族、支那語や安南語や暹羅語などの屬する印度支那語族、及び我が國語などが屬するといふ(一)ウラル-アルタイ語族であらう。ウラル-アルタイ語族は、我が日本列島・朝鮮・滿洲・蒙古・シベリヤ・中央亞細亞から、飛びはなれて歐羅巴のトルコ・(二)フィンランド・(三)ハンガリーにまで擴がつてゐる。この語族の中で、特に我が國語には、祝詞や古事記や萬葉集のやうな立派な文學が上古から現れてゐる。中古・近古・近世の間においては、物語・戰記・謠曲・淨瑠璃・小說・和歌・俳諧などの文學が榮えてゐる。文學のにぎやかなこと、世界の何れの國に對しても決して遜色はあるまい。且つ我が古今の文學は、世界の最も優秀なる支那・印度及び西洋の三

(一) Inflected language.
(二) Agglutinative language.

大文明を吸收し、之を日本思想に融和させて、ここに特殊なる文學を成してゐる。加之、我が國語は語彙も豐富で、語格も整つて、よく綿密なる思想を發表するに適し、(一)曲尾語たる西洋諸國語に對して、立派に(二)添著語の優れた代表者である。この國語を日日用ひてゐる人口は、內地人ばかりでも實に五千幾百萬、卽ち世界總ての人口の凡そ三十分の一以上といふべき大きな數である。

我等は斯樣に我が國語の尊ぶべき資格を認めると同時に、益〻その勢力を發達させることを怠つてはならぬ。我が國語は現に外國に向つて發展してゐないではないが、我が國民が漢文や英語・獨逸語におけるが如く、深く我が國語の「おかげ」を蒙つてゐる國民は、殘念ながらまだ外國には認め得ない。我が東亞新興の國民は、須く大いに國語を尊重し、且つこれが愛護發展に努力せねばならぬ。

（日下部重太郎—「現代の國語」に據る）

二　百花譜

郊原一路、滿目すべて薄なり。夕陽沈まむとして雲色哀しみ、西風冷かにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬の嘶く聲まづ聞え、小歌聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるままにて、馬の自ら歩むは熟せる路にや。鴉飛びつくして四面寥廓たり。ふと顧みれば、招く尾花の

末に、一圓の大月明かなり。

雀の聲滑かなる冬の日和、日かげ暖かに圓窗を射て、火鉢の火も消えかかれり。室淨うして點塵なし。牀の間の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帶びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁丁として響く。

桃花數株、茅屋を圍みて、雞聲午なり。桔槹動かずして一犬門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲機杼の聲と共に洩來る。

一泓の池水、半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に花あり。健鯉時に躍りて波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して人籟なし。曉煙垂柳を罩めて、日未だ昇らず。

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなたは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を著けたり。流鶯時に一聲。思ひがけずも、一輪の花ぼとりと水に落ちて、水暫く文をなす。

村はづれに岐路ありて、問はむとするに人なし。馬頭觀世音の石像、頑として物いはず。側に生ひ出でたる幾莖の女郎花、なよなよとして風にもだゆ。

侶伴なくて詩を思ひつつたどる山路、到る處櫻花多し。春風一陣、空に晴雪をちらし、地に綾の筵を敷く。

池畔の掛茶屋、少女欄に凭り、手をうちて鯉を呼ぶ。穉兒立ちて麩を投ぐ。棚上の藤花累累としてさがりて、人の頭に及

ばむとす。

麥浪に連なる一面の菜花、菜花や黃、麥浪や綠。滿地みな色あり。行人絕えて遊絲のどかにかかり、一雙の胡蝶追逐し去つて行く處を知らず。

夏の日暑く、山路嶮しく、喘ぎ喘ぎ上るに、渴を催して堪へ難き時、水音聞えていと嬉しく、荊棘を排してこれに就けば、急湍淸玉を迸らす。一掬二掬三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑らかなる巖の上に百合の花危げに立てり。折らむと欲して折るに忍びず、立別れむとすれば、滋き水のしぶきに、花、淚を含むが如し。

白鷺の小首傾げて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて柳影長き隄の上、往きかふ人なし。巨蟹這ひいでて、泡を吐きつつ螯を擧げて空を挾む。

馬に食ませむ料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸りゆく田舍少女、知りてか知らずてか、その草に桔梗一枝まじれり。

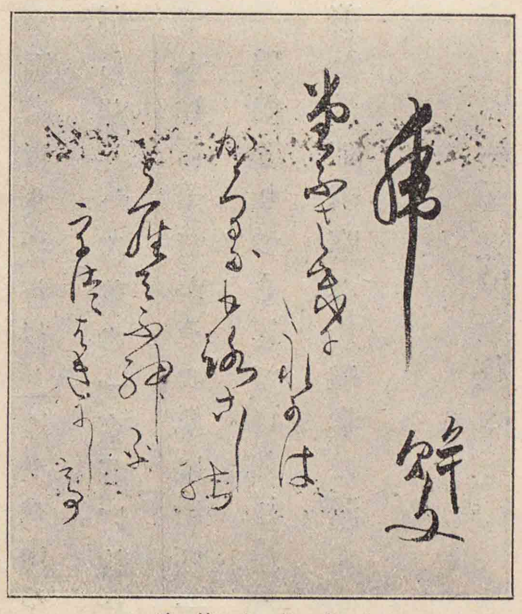
鶺鴒語りつくして、日暮れむとす。人を待てども到らず。蕭蕭たる細雨、庭の秋海棠に灑ぐ。（大町桂月―春草秋草）

三　落花

春深くなるままに、ほろろうつきぎすの聲におどろかされて、起きいで見れば、雲雀のそら高くあがるもをかし。櫻は

（一）大鏡にあり、花山天皇の御事なり。

もとだち憎さげなればと、なにがし（一）のみかどのおほせごともあれば、垣の外に植ゑなめつるに、梢のゆらゆらとうちなびきたるが、霞のまより咲きこぼれたるは、似るものなくめでたし。また椿の色色にさきつらなれるは、げに八千代の春をかけつらむと見ゆるに、木蓮のしろきも、むらさきなるも、花ぶさのいと大きくしてゑみひらけたるは、大君すがたともいはまし。



久米幹文筆蹟

（二）いもに似る草と見しよりわがしめし野邊の山吹誰か手折りし。（萬葉集、大伴家持）

四　新古今集抄

山吹のうちしなひてたをやかに匂ひたるは、げに妹（二）に似るてふ名もしるしかし。きのふけふ、あからめもせでまもりをれば、人く人くと啼く鳥さへおとづれ來て、嬉しきあまりに、野山の春をもゆかしとおもはず、思ひ寐の夢にさへ面影に見ゆるは、いかにそめつるこころざしならむ。

さるを一夜風あらましく、雨さへうちまじれば、こはいかにとおもふに、あけはててみれば、庭の苔ぢは香へる雪にうづもれたるやうにて、こずゑに殘れるは三つが一つもなし。あさましといふもおろかなりかし。

（久米幹文―水屋集）

（一）後鳥羽天皇。（一八三七—一八九九）
（二）後白河天皇の皇女。
（三）藤原良經。（一八二九—一八六六）

ほのぼのと、春こそ空に來にけらし、
　天の香具山かすみたなびく。
　　　　　　　　（一）太上天皇

見渡せば、山もと霞む水無瀨川、
　夕べは秋となに思ひけむ。
　　　　　　　　（一）太上天皇

山深み春とも知らぬ松の戸に、
　たえだえかかる雪の玉水。
　　　　　　　　（二）式子內親王

うちしめりあやめぞかをる、杜鵑
　鳴くや五月の雨の夕ぐれ。
　　　　　　　　（三）攝政太政大臣

（四）藤原氏。（一七七四—一八六四）
（五）（一七七八—一八五〇）
（六）（—一八六二）
（七）新古今撰者。（一八二二—一九〇一）

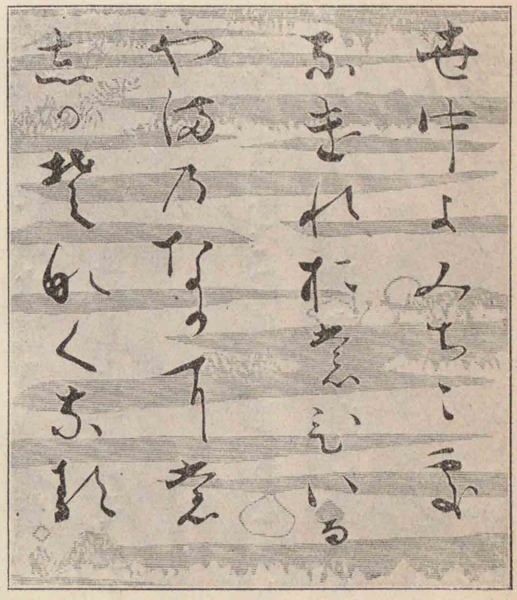
昔思ふ草の庵の夜の雨に、
　涙なそへそ、やまほととぎす。
　　　　　　　　（四）皇太后宮大夫俊成

道のべに清水流るる柳蔭、
　暫しとてこそ立ちどまりつれ。
　　　　　　　　（五）西行法師

寂しさはその色としもなかりけり、
　槇立つ山の秋の夕ぐれ。
　　　　　　　　（六）寂蓮法師

見渡せば花も紅葉もなかりけり、
　　　　　　　　（七）藤原定家朝臣

(一)新古今撰者。(一八一一—一八九七)



藤原定家筆蹟

浦の苫屋の
秋の夕ぐれ。

駒とめて
袖うちはらふ
蔭もなし、
佐野のわたりの
雪の夕ぐれ。

(一)藤原家隆朝臣

滋賀の浦や、遠ざかり行く浪間より、
こほりて出づる有明の月。

明けば又こゆべき山の峯なれや、

(二)慈鎭和尙。(一八一五—一八八五)

(三)(一八一三—一八七六)

空ゆく月のすゑの白雲。

(二)前大僧正慈圓

有明の月の行く方をながめてぞ、
野寺の鐘はきくべかりける。

(三)鴨長明

石川やせみの小川の清ければ、
月もながれを尋ねてぞすむ。

五 方丈記抄 上

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは且つ消え且つ結びて、久しくとどまるこ

となし。世の中にある人と住家と亦かくの如し。玉敷の都の中に棟を竝べ、甍を爭へる、尊き、卑しき人の住居は代代を經て盡きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し、夕べにうまるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人何方より來りて何方へか去る。又知らず、假の宿り誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。この主人と住家と無常を爭ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露おちて花殘れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへども夕べを待つことなし。

　凡そ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不可思議を見る事やや度度になりぬ。去んぬる安*元三年四月二十八日かとよ、風烈しく吹きて靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の巽より火出で來りて、一夜が間に塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けりとなむ。吹迷ふ風にとかく移り行く程に、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焔を地に吹きつけたり。空には灰を吹き

*即ち治承元年。(一八三七)

たてたれば、火の光に映りて普く紅なる中に、風に堪へず吹切られたる焔、飛ぶがごとくにして一二町を越えつつ移り行く。その中の人、現心あらむや。或は煙にむせびて仆れ伏し、或は焔にまぐれて忽に死しぬ。或は又わづかに身一つ辛くして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず、七珍・萬寶さながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六焼けたり、ましてその外は數を知らず。すべて都の中三分の一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營み皆愚かなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し、心を惱ますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日のころ、中御門京極のほどより大いなる辻風起りて、六條わたりまで嚴しく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中に籠れる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平(ひら)に倒れたるもあり、桁・柱ばかり殘れるもあり。また門の上を吹放ちて四五町が外に置き、また垣を吹拂ひて鄰と一つになせり。況や家の内の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺の類、冬の木の葉の風に亂るるがごとし。塵を煙のごとくに吹きたてたれば、すべて目も見えず。夥しく鳴りどよむ音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かばかりはとぞ覺ゆる。家の損亡せるのみならず、これを取繕ふ間に身

*一八四一。

を害ひて、かたはづけるもの數を知らず。この風、坤の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かかることやはある。ただごとにあらず、さるべき物のさとしかなどぞ疑ひ侍りし。

六　方丈記抄　下

又養*和の頃かとよ、久しくなりてたしかにもおぼえず。二年があひだ世の中飢渇してあさましきこと侍りき。或は春・夏ひでり、或は秋・冬、大風・大水などよからぬ事どもうちつづきて、五穀ことごとくみのらず。むなしく春耕し夏植うる營みのみありて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。これによりて、

國國の民或は地を捨てて境を出で、或は家を忘れて山に住む。さまざまの御祈りはじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、みなもとは田舍をこそたのめるに、たえてのぼるもの無

鴨長明

ければ、さのみやは操もつくりあへむ。念じわびつつ、さまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、さらに目みたつる人もなし。たまたま換ふるものは、金を輕くし、粟を重くす。乞食、道のほとりにおほく、うれひ

かなしぶ聲耳に滿てり。前の年かくのごとく辛くして暮れぬ。明くる年は立ちなほるべきかと思ふほどに、あまさへ、えやみうち添ひて、まさるやうにあとかた無し。

世の人みな飢ゑ死にければ、日を經つつきはまり行くさま、少水の魚の譬にかなへり。はてには笠うち著、足ひきつつみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたる者ども、ありくかと見ればすなはち仆れ伏しぬ。ついひぢのつら、路のほとりに飢ゑ死ぬるたぐひは數も知らず。とり棄つるわざもなければ、臭き香世界に充ち滿ちて、變りゆく形・有樣、目もあてられぬ事多かり。況や河原などには、馬・車の行きちがふ道だにもなし。あやしき賤・山がつも力つきて、薪さへ乏しくなりゆけば、賴む方なき人は、みづから家をこぼちて、市に出でてこれを賣るに、一人がもちて出でたるあたひ、なほ一日が命を支ふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かかる薪の中に、丹つき、白がね・黃金の箔などところどころにつきて見ゆる木のわれ相まじれり。これをたづぬれば、すべき方なき者の、古寺に至りて佛をぬすみ、堂の物の具をやぶり取りてわり摧けるなり。濁惡の世にしも生れあひて、かかる心うきわざをなむ見侍りし。

（鴨長明）

七　鎌倉時代の文學

鎌倉時代のうち、文壇の最も賑ひたるを、そのはじめ三四

(一)一八六五。

(二)古今集。後撰集。拾遺集。後拾遺集。金葉集。詞華集。千載集。新古今集。

十年とす。時に後鳥羽天皇帝室の式微を憂へ、鋭意事に當りたまへば、都人もまた關東の勝利に憤慨して、新に活氣を生じ、文藝もこれが爲に一時の盛況を呈したり。

文學は前期にひき續きて、和歌最も盛なり。(一)元久二年、後鳥羽上皇の敕によりて、藤原定家・同家隆等、新古今和歌集を撰す。延喜よりこの時に至るまで、和歌の(二)敕撰八度に及びしが、そのうち古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は千載の歌風を大成したるものにして、かの清新の體を節するに、更に古今の古調を以てしたるなり。

上の好むところ下これに靡き、當時有名なる歌人輩出す。後鳥羽・土御門・順德の三帝ともにその道を得たまひ、攝政藤原良經は天授の才を以て時流を詠じ、その叔父僧慈圓は西行に學びて、好んで佛教の趣味を含め、將軍實朝は萬葉の古調を喜ぶ。定家は俊成の子にして、家隆と共に、名匠の譽一世に高し。定家は古語の平穩なるを喜べども、措辭は巧緻を極めて、時としては了解に苦しむものあり。家隆は暢達の調を用ひたり。

平安朝のなかば頃より、漢學漸く衰へ、上流の人はなほこれを第一の學問となせども、多くは純粹なる漢文を書きえず。ここに和漢混淆の一體を生ず。衰ふるは興る基にして、この文體は國文の優美に漢文の遒勁を交へ、幽玄なる佛語をさへ加へて、遂に後世通用の文となりたるなり。この文體を

以て記したるものにて、最初に成功したるは方丈記等なるべし。方丈記は鴨長明が、源・平相爭ひて紛擾絶えまなき世を厭ひて、山城の日野[一]に隱棲せる始末を記せる短篇にして、文章の絢爛なるを以て顯る。

更にこの和漢混淆體の大いに光彩を放ちしは、源平爭鬪の始末を記したる軍記類なり。そもそも源・平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞するものの感懷は、うたた假作小說よりも深し。ここにおいて軍記の作あり。その最初に出でたるは保元物語・平治物語にして、文章やや質實なり。ついで平家物語は曲節をつけて諷誦せむがために作られしものなるべく、その體悽惋を主とすことに佛教の思想を鼓吹し、記

(一)山城國宇治郡。

事は勇武なる章と優美なる章と交錯して、興味を深からしむ。源平盛衰記は蓋しこれを補訂大成せしものなるべく、文章華麗にして、漢語を交ふること平家より多し。これらの軍記は、いづれも源平爭鬪の世より建長[二]年間までの作なるべし。

承久[三]の役に官軍敗れて、鎌倉幕府の基礎はいよいよ堅く、これより京都は獨立・自由の思想を失ひ、萎靡して振はず。關東の武士はもとより文筆に疏ければ、鎌倉時代中期以後の文學には見るべきもの少なし。散文には、建長年間に出でたる十訓抄・古今著聞集および時代定かならぬ宇治拾遺物語等のやや見るべきあるのみ。これらはいづれも平安朝の今

(二)一九〇九―一九一五。

(三)承久三年。(一八八一)

(一)俊成—定家—爲家—爲氏(二條)
　　　　　　　　　—爲敎(京極)
　　　　　　　　　—爲相(冷泉)

昔物語等に倣ひて、古來のおもしろく珍しき事實を輯めたるものにして、率直平易なる文體にてかきたり。

和歌の衰へたるも散文に同じ。人心は漸次萎縮せるに、藤原俊成・定家二代相續いで名手の譽ありしより、歌道の勢力はすべてその一門に歸す。その子孫(一)は二條・京極・冷泉の三家に別れて、互に反目せしが中に、二條家は嫡流として殊に榮え、歌集の敕撰も多くはその一門より出でしが、その家を尊くせむが爲に、種種の法式を設けて子弟を束縛したれば、斯道は卻りて日日に萎縮するに至れり。(藤岡東圃)

(二)後白河法皇。
(三)一八四六。
(四)清盛の女、安德天皇の御母。
(五)山城國愛宕郡大原村舊大原莊。
(六)左大將實定。
(七)大納言兼雅。
(八)權中納言源通親。

八　大原御幸

かかりし程に、法皇(二)は文治(三)二年の春の頃、建禮門院(四)の大原(五)の閑居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・彌生の程は嵐烈しう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつららも打溶けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人人には、後德大寺(六)花山院(七)・土御門(八)以下公卿六人、殿上人八人、北面少少候ひけり。

遠山にかかる白雲は散りにし花の形見なり、青葉に見ゆる梢には春の名殘ぞ惜しまるる。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草の茂みが末をわき入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し

(一)大原村大字草生にあり。

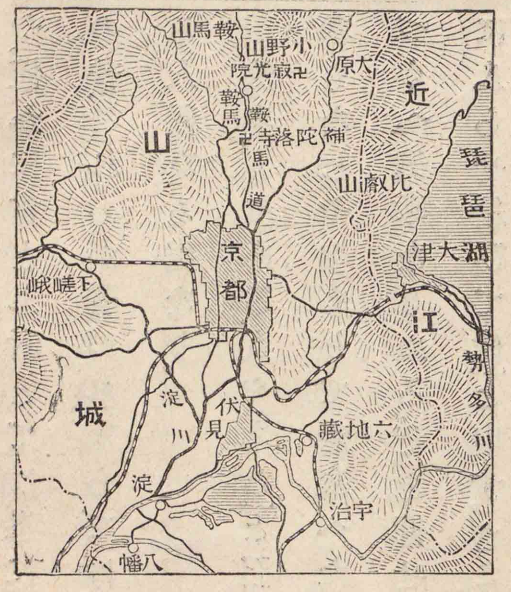
召し知られてあはれなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院(一)これなり。舊う造りなせる泉水・木立よしあるさまの處なり。「甍破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ」とは、かやうの處をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつつ、池の浮草波に漂ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉交りの遲櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹さき亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君のみゆきを待ちがほなり。法皇これを叡覽あつてかうぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて、

(二)和漢朗詠集の句。

波の花こそさかりなりけれ。



舊りにける巖の絶間より落ちくる水の音さへ、ゆゑよしある處なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪に書くとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・朝顔這ひかかり、しのぶ交りの忘草、(二)「瓢簞屢空し、草顔淵が巷に滋く、藜藋深く鎖せり、雨原憲が樞を濕す」ともいひつべし、杉の葺きめもまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影に爭ひて溜るべしとも見えざりけり。後

は山、前は野べ、いささ小笹に風騷ぎ、世にたへぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、僅かに言とふ者とては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらが音づれならでは、まさきのかづら・青つづら、くる人稀なる處なり。

法皇、「人やある、人やある。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。ややありて老衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この山の上へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや、御痛はしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒・十善の御果報盡きさせたまふによりて、今かかる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有樣にてもかやうのことを申す不思議さよとおぼしめして、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。ややありて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波内侍と申すものにて候なり。母は※紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬるほど思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押し

※信西の妻朝子。

あて忍びあへぬさま、目も當てられず、法皇「げにこそ汝は阿波内侍にてあなれ。御覽じ忘れさせたまふぞかし。何事につけても只夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議のこと申す尼かなと思ひたれば、ことわりに申しけりとぞ各〻感じあはれける。

さて女院の御庵室へ入らせおはしまし障子をひきあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられたり。左に普賢の畫像右に(一)善導和尚竝に(二)先帝の御影をかけられたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所とおぼしくて、竹の御竿に麻の御衣、紙の衾なんど懸けられたり。さし

(一)唐の名僧。(一二七三—一三四一)
(二)安德天皇。

も本朝・漢土のたへなる類、數をつくしし綾羅錦繡の粧、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りしことども今のやうに覺えて、皆袖をぞしぼられける。

ややあつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつつ、おり煩ひたる樣なりけり。法皇「あれはいかなる者ぞ」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花筐臂にかけ、岩躑躅とり具して持たせたまひて候は女院に渡らせたまひ候。爪木に蕨折りそへて持ちたるは鳥飼中納言維實が女、五條大納言邦綱の養子、先帝の御乳母、(三)大納言典侍局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公

(三)平重衡妻。

卿・殿上人も皆袖をぞ濡されける。女院は「世を厭ふ御習といひながら、今かかる有様を見えまゐらせむずらむはづかしさよ。消えも失せばや」と思し召せどもかひぞなき。宵宵ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるるに、曉起きの袖の上、山路の露もしげくして、しぼりやかねさせたまひけむ、山へも返らせたまはず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる處に、内侍の尼參りつつ、花筐をば賜はりけり。

「世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。早早御見參ありて、還御なし參らせ給ひ候へ」と申されければ、女院御涙を抑へて御庵室に入らせおはします。一念の窗の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かな」とて、御見參ありけり。（平家物語）

九　晩春の別離

時は暮行く春よりぞ、　また短きは無かるらむ。
恨は友のわかれより、　さらに長きは無かるらむ。
君を送りて花近き　この高樓に來て見れば、
綠に迷ふ鶯は　霞空しく鳴きかへり、
白き光は佐保姫*の　春の車駕を照すかな。
これより君は行く雲と　ともに都を立出でて、

*春の神、もと奈良の東なる地名に出づ。

(一)近江國阪田郡。
(二)近江國滋賀郡。
(三)同上。
(四)白河法皇。
(五)伊賀・伊勢の二國と畿內との境界にある山嶺を總稱して鈴鹿山といふ。

懷へば琵琶の湖の　岸の光にまよふとき、
東、膽吹(一)の山高く、　西に大比叡(二)・比良(三)の峯、
日は行きかよふ山山の　深きながめをふしあふぎ、
いかにすぐれし想をも　沈める波に湛ふらむ。

流はむなし、法皇(四)の　夢かすかなる鴨の水。
水にうつろふ山城の　みやびの都、行く春の
霞める姿見つくして、　畿內に迫る伊賀・伊勢の
鈴鹿(五)の山の波遠く、　海に落つるを望むとき、
いかによろづの恨をば　空行く鷲に極むらむ。

春去りゆかば、靑によし　奈良の都に尋ね入り、
としつき君がこひ慕ふ　御堂のうちに遊ぶとき、
古き藝術(たくみ)の花の香の、　伽藍の壁に遺りなば、
いかに韻(ひびき)を身にしめて、　深き思に沈むらむ。

さては秋津の島が根の　南のつばさ紀の國を
回りて進む黑潮の、　鳴門に落ちて行くところ
天際遠く白き日の　光をもらす雲裂けて、
目ぢはるかなる大海の　波の躍るを望むとき、
いかに胷うつ音高く、　君が血汐のさわぐらむ。

（一）（二）播磨國明石郡。

または名に負ふ歌枕、　波に千とせの色映る
明石（一）の浦のあさぼらけ、　松、萬代の音に響く
舞子（二）の濱のゆふまぐれ、　もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影暗く、　狹霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞くときは、　いかに浦邊をさすらひて、
遠き昔を偲ぶらむ。

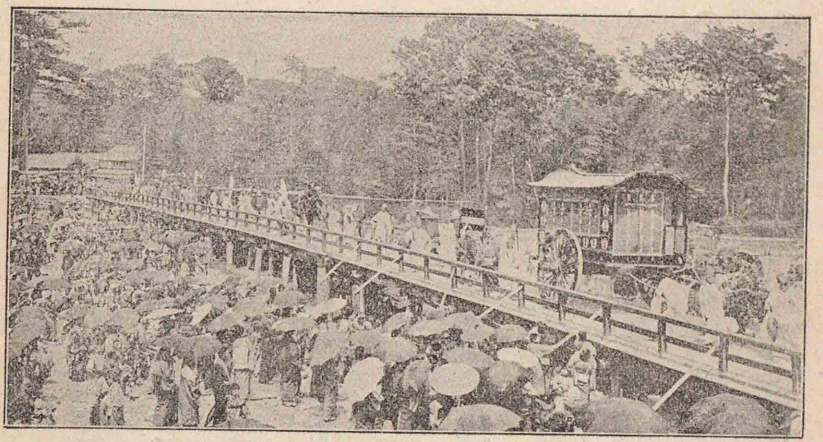
＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

さらば名殘はつきずとも、　袂を分つ夕まぐれ、
見よ、影深き欄干に　煙をふくむ藤の花。
北行く雁は大空の　霞に沈み、鳴きかへり、
彩なす雲も愁ひつつ、　君を送るに似たりけり。

ああ、いつかまた相逢うて、　もとの契をあたためむ。
すでに柳はふかみどり、　人はあかねど行く春を
いつまでここに留むべき、　我に惜しむな、家づとの
一枝の筆の花の色香を。　（島崎藤村―夏草）

一〇　新緑

白樫の若葉の露を帶びたるに、月のさしたるは言ふべくもあらず。椿・柏などの茂り合ひたるが風に吹かれて、その葉の靡き合ひたるは、葛の葉の秋さへ思ひやられてをかし。楓の青青とはえたる、まして庭などに植ゑたるが、赤き芽を匂



賀茂の葵祭

はせたるは、愛嬌こぼるる少女を見る心ちぞする。藤の葉の長う伸びて棚をおほへるは、花の春のゆかりも思ひおこされ、櫻の若葉の柔かなるには、眠れる蝶の夢さへおしはからる。

　榎・楠・銀杏などの高く大きなるが茂り合ひたるは、殊に人の心を清うするものなるが、賀茂の祭のこの下蔭に行はるるは、神神しさも、花やかさも添ひて、初夏のけし

きはここに盡きぬべくぞ思はるる。さるは花傘・菅傘・鈴懸の馬・山城使・内藏使・舞人・陪從などの列を正してゆくも、いにしへ思はるるに、檢非違使の、殊に縫腋の袍を著、老懸を疊紙につつみて懷に入れゆくなど、この御祭にのみ行はれし故實も、そのままなるぞうれしき。

　草木の綠つややかにして、御手洗の水も青むばかりなるに、東遊の樂さやかにひびきて、舞人の袖のうつれる、いかで心もすまざらむ。敕使の貴げに宣命よむ聲に、廣前の御帳の風に動ける、かしこさも添ひぬかし。馬場にては草の筵をふみ散す走馬のめざましきがあり。樗の花の、青きが中にひとり紫せるもゆかし。物賣る女どももいと多きが中に、大原女の

赤き襷かけたるぞ、ことに目立つめる。陸の松もけふはことに色そひ、下かげの卯の花の、川に臨めるが、布ひきはへたるやうなるもすがすがし。

さてもかくみやびかなる眺は、西の京にまされるところぞあらざめれど、東海道第一のけしきをなせる富士が根の初夏の眺は、また飽くことなき極みにぞありける。一日、岩淵驛なる(一)古谿荘を訪ひまゐらせしに、その庭より打ちあふぎたる頂の雪の清くさやかなるはいふもさらにて、裾野のおしなべて青緑につづきたるは、かばかりの景色はいづこにか求め得むとぞおもひし。愛鷹山・鷲津山なども、この緑の中の一塊となりて、はてては大海の青きに聯なりたるに、遙かなる眞帆・片帆の白きと、高根の雪との外は天地悉く青筵を敷きたるやうなり、昔より春は青色を帶びて立つといひ傳へたれども、まことは初夏のもてくる色なりけり。

薄の葉、麥の穗柊荊の枝さへ、このころまでは、手を切るとも見えず、八角金盤の葉のなよやかなるをとり來りて頬におしあつれば、ひやひやと心ちよく、扇骨木の若葉つみとりて口にくはふれば、いとやはらかに、あまき汁さへ出でぬるいとなつかし。桑の葉の蠶にくはるるもこの頃の事にして、茶の芽の爭ひつまるるもきのふけふの事ぞかし。

「(二)立つことやすき花のかげかは」と、古人の歎きけむもさることながら、この柔かなる青葉に月かげ日かげのさしくは

(一)駿河國庵原郡富士川町田中光顯伯別莊。

(二)けふのみと春をおもはぬ時だにも、立つこと易き花の影かは。(古今集、凡河内躬恆)

はれる、いかで花の春におとるべき。ましてはほととぎす一聲雲を破れば、綠の色も一しほ加はり、こぼるる露も靑む心地するをや。

ほととぎす靑葉もりくる一聲に、
花にねし夜の夢はさめてき。

（池邊義象）

一一　綠蔭淸話

近來は、一面から見ると、從來の如き風流な趣味は追追なくなつて來るやうであるが、併し他の方面から言ふと、從來よりも一層、書畫とか骨董とか云ふが如きものが行はれるやうにも見える。吾吾のやうな字の拙い者でも、到る處揮毫を賴まれる。しかしその賴み方が頗る無趣味・無風流で、十人が九人までは、修養になるとか、教訓になるとか云ふものを書いて吳れと云ふ、頗る直接な、露骨な教訓・金言などを好む。一體、修養はさう直接に眞面目くさるやうな言葉ばかりで出來るものではないのに、一向そこに氣が付かないで、修養ならば修養、教訓ならば教訓と、直接な、露骨な言葉で無くてはならぬといふのが、風流趣味の廢つたところだと思ふ。

山が高いとか、水が淸いとか、月がよいとか、花が麗しいとかいふことは、直接な教訓ではないが、閒接にはこれが修養になるのである。眞の風流の味を味ふことが、つまりは教訓にもなるのである。修養・教訓を得るには何うしても心を淸

めてかかるのが一番である。言換ふれば自身の心を天然に接觸さす事が必要である。それ故書にしても、必ずしも論語や孝經などの語句のみが修養になるものではなく、又畫にしても、必ずしも孔子や楠公などの像の如きもののみが教訓になる譯でもない。山水の秀でた姿を謠ひ、花鳥の麗しい有様を描き出した所にも、やはり修養・教訓になる點は澤山ある。世間には、この閒の消息を一向知らぬものが多い。

又書畫の如きも、値段の高い、眞に珍しいものなら珍重するといふのが、かの骨董好の有様である。併し値段は無くとも、珍奇でなくとも、之に對すれば人世の事を忘れるといふ趣味があれば、そこに莫大な價値があり、修養・教訓の資にも

なるのである。要するに今日の骨董好は表面的には風流であるらしく見えるけれども、其の實は全く趣味といふものがなくなつて仕舞つて居る。すべて何事によらず現金的になつたのである。

古人の語で、風流にして且つ修養になるものの一二を擧げて見よう。

相地於鏡湖危峯之閒、好花一瓶、名香一爐、一箇蒲團、一箇鉢盂、佛號數千聲、華嚴一兩卷、不亦好乎。

中堂讀倦遊後園歸絲桐三弄、心地悠然、風靜月明、天壤之閒不知復有何樂也。

香清茶熟、有客到門可喜。鳥啼花落、無人亦自悠然。

斯ういふことは、一寸見ると唐人の寐言のやうであるが、今日世の中の事に齷齪として、朝から晩まで勞役する人間は、殊に斯ういふ事を時時口に唱へて、よく其の意味を味ふことが修養上必要であらうと思ふ。

全體、支那畫や日本畫には、山水であるとか、草木であるとか云ふ種類が多い。これは或必要から起つたものであると思ふ。高い山を見ることも出來ず、清い川の流を見ることも出來ない都人士は、山水の美を詠じた詩歌を楣間に懸けて眺めるがよい。自ら煙嵐の境に立つ想があらう。家と家とが相接してゐて、草や木を植ゑたくとも、地面のない處では、蘭菊・松竹の畫を牀の間に掛けて眺めるがよい。自らその清香

に薰化せられる感があらう。

鹿爪らしい直接的な修養談のみが必ずしも效果のあるものでは無い。それよりも、暫くでも仙人的の境遇に入るのが却て效果がある。從つて科外の讀書も、哲學めいた難解のものでなく、和書ならば方丈記や徒然草の樣なものがよい、漢書ならば菜根譚(一)・醉古堂劍掃(二)などがよろしい。之に依つて心を自然に瞑合することが出來るならば、身は紅塵の裏にありと雖も、自ら天地の靈體に接して、自ら修養をなすことが出來るであらうと思ふ。

（前田慧雲―「活修養」に據る）

(一)洪自誠著。
(二)陸紹衍著。

一二　海と日本文學　上

わが邦は四圍みな海にして、繁華・殷富なる都市は海岸線に多く、隨つて人口もまた古來海岸線において稠密なりしこと疑ふべからず。されば邦人はおのづから海と相離るべからざる直接間接の關係點を有すること少なからず。隨つて我が文學も亦おのづから海と少なからざる關係を有すべき理なり。例へば、潮來り汐去る面白さを詠じたる歌、又は晴れたる日の親しむべく、風だてる日の怖るべき海原の樣を記せし文、或は又浪のはてより上る日のうるはしさ、島山のあなたに傾き落つる日のあはれさなどを寫せしもの、勇ましき舟子が上を傳へたる小說なんどは、我が文學に多く見ゆべき筈ならずや。

然るに事實はこれに反せり。和歌には海に關するもの甚だ少なし。偶、これなきにあらずと雖も、多くは海を怖れ、海を厭へるが如き思想を有するものにして、海國民の歌としてはふさはしからぬものとやいはむ。まことに悲しげなるもののみなり。試に古今集以後の敕撰の歌集、又は一家の歌集の類を手にして、漁夫・舟人の類を詠じたる歌をあらため見よ。その世渡りの危きを悲しみ憐む意の痕を留めざるもの幾干かある。萬里の海を我が路として、八方の風を驅逐する舟人の意氣を詠じたる和歌、又は千尋の波の底より呑舟の大魚を獲て舷頭に獨り嘯く漁夫の感興を描ける章の如き幾干かある。和歌衰へて後の俳諧・發句は、新しき酒を盛れる

小さき嚢なり。されどこの嚢の中にも、海に對する人の心を勵まし、勇ますに足りぬべき、好き酒の盛られたる事は幾度もあらずして、卻て折角の新しき嚢に、平安朝以來の海を怖るる古き思想の、譬へば腐りたる酒の如きものの盛られたること少なからぬやう見ゆ。小說は源氏物語・宇津保物語の昔より、海とさへいへば怖るべきもののやうに描けるが多し。風に遇ひて船の破るること、又は思はぬかたに吹流さることなどは、古來の小說家の好みて描けるところなるが、その物語は大抵、机上にて、作者が海に對する自己の恐怖心より捻り出したる、曖昧・無實のものたるに過ぎず、一も眞實らしき狀態を描きて、海上の光景を讀者に感知せしむるものの無し。さればそれ等の物語は、徒に、その讀者をして、海の怖るべきことを空想上に深く思ひ浸ましむるほかには、何の結果をも遺す事なし。古來の小說少なからずと雖も、海員の生活、船上の旅客の眞情等を書現ししもののごときは幾干かあらむ。予は實に或一章にすら、海に關する記事のやや矚目に値すべきものを含める小說の名を指示する能はざるを悲しむ。謠曲・淨瑠璃も亦然り。作者が海に對する恐怖心の外には、海に關する記事中に於て見出し得べきもの無しといふも不可なきに似たり。若し強ひてその外に何物をか尋ね得たらむには、そは海神・龍王等に對する迷信ならむのみ。かくの如きは和歌・俳句・小說・謠曲・淨瑠璃等と海との關係な

り。如何に強烈なる愛國心を以てこれを辯護せむとすとも、何人もその辭無きに窮せざるを得ざらむ。

かくのごとく、我が邦と海との地理上の關係に文學の相應せざること甚しけれども、これに依つて直に我が邦の歌人・俳諧師・小說家、謠曲・淨瑠璃の作者等を、思想偏僻なり、眼界狹小なり、伎倆拙惡なりと爲さむは、あまりに酷烈にして、雅量に乏しき判斷となさざるべからず。如何となれば、文學はその地理に相應して發達・繁榮すべきもののみならず、また實にその歷史に相應して發達・繁榮するものなればなり。されば我が邦と海との地理上の關係を考察するが如く、我が邦と海との歷史上の關係をも亦考察せずんば、我が邦の文學を論ずるに於てその判斷の中正を得ざるべきはいふまでもなし。

一三　海と日本文學　下

然らば我が邦と海との歷史上の關係は如何、德川氏は大船を造ることを禁じ、海外諸國と交通することを欲せざりき。陸上の交通驛傳の諸法は甚だ整理せられたるに拘らず、海上の交通、舟運の利は甚だ輕視せられて、膽勇ある豪商等の經營のほかには、政府も士人も殆ど指を海事に染めず。諸侯の參觀交替の如きも、皆必ず陸路を取りしが如きは、最近三百年の歷史なり。舟子は志州の鳥羽より豆州の下田に至

る航路を以て、非常の難關と思惟し、旅客は中國諸港より讃州多度津に至る短距離の航海を以て大冒險の如く恐怖し、一般の人民は大罪人と舟子とのほかは海に航すべきにあらずと考へ、婦女子は海を以て龍神海坊主・船幽靈等の巣窟と信じたりしは、徳川氏が我が邦民をして壺中に遊樂せしめし政治の結果なり。かくの如き歴史上の狀態に依りて考察する時は、我が邦の文學と海との關係は、地理上には相應せざるも、實に能く歴史上には相應吻合せりといふべし。

また徳川氏以前に於ては、足利氏が京都に據りたる、桓武天皇が山城の山閒に都を定め給ひたる、猶その以前に至りても、大和の地に都の定められたる等は、著しく我が邦の文

學をして海と相遠ざからしめたり。特に元祿以前の文學は國民の文學といはむよりは寧ろ貴者の文學といふべきものなれば、その國都の海邊を離れし山閒に置かるるに至りしは、都府の住者たる貴者をして海に遠ざからしめ、隨つて又我が邦の文學をして海に遠ざかるに至らしめし大原因なりといふべし。かくの如くにして、奈良・京都の文學者、卽ち我が邦の文學の父たり、母たる位置に立てる文學者よりして、海といへば須磨・明石もしくは紀州の濱邊の外は知らぬが如き知識・感情を相承せしを以て、その兒孫たる文學者の、今に至るまで、海に關する篇什の何一つ我が邦の文學史を飾るに足るべきものを出さざるも、敢て怪しむに足らずと

やいはむ。

都の大和に在りし閒、遣唐使の存せしは、萬葉集をして聊か古今集よりも海に關する歌の包含を多からしめたり。古今集を讀終つて、溯つて萬葉集を讀まばその集の作者等がかの集の作者等よりも海に親しかりしことは、何人と雖もこれを認め得む。これ亦海に對しては、我が文學が我が歴史に相應せる一證なり。

萬葉集以前は載籍甚だ乏しければ、吾人をして精細確實なる斷案を下す能はざらしむれども、古今集を抛つて萬葉集に就けるが如くに、萬葉集を續終つて、古事記・日本紀等に見えたる傳說・歌謠を見るときは、吾人は海國民としてここ

に一種の愉快を感じ、我が邦上古の文學は、歴史上にも、地理上にも能く相吻合して、我が祖先等が海に對する思想・感情及び知識の決して萎縮的ならざりしことを知る。實に記・紀には海ならびに船等に關する記事の多きこと、平安朝以來の書史には決してその比を見る能はざる程なるが、これ明かに我が本來の日本人、卽ち歴史的の繫縛を被らざりし時代の邦人が、後世の邦人の海に對して畏怖心をのみ抱くが如くならざりしことを證するにあらずや。

我が邦の地理上の狀態は、我が邦の文學をして海に親しましむべき因をなせり。しかるに歴史上の狀態は、上世を除きては、我が邦の文學をして海に遠ざからしむべき因を爲

せしこと上述の如し。かくの如くにして、我が邦の文學は、海國の文學としては甚だ相應せざる狀態を有するに至れり。然れどもこれ實に歷史上の關係の壓迫に因れること上述の如くにして、邦人本來の性質は海洋に對して怯懦なるにあらず。又古來の歌客・文人の思想の偏僻、眼界の狹小、伎倆の拙劣なるのみよりして、かくの如きに至れりと爲すべからざるは、歷史の繫縛を被らざりし時代の人の手に成れる記・紀の中に、如何ばかり海に關する記事の多きかに照して、極めて明かなりとす。

海中に國を成せる邦人の、呑海の氣象無くんば、如何ぞ世界に雄を稱するを得む。地理上の狀態は千古渝らず。歷史上の狀態は雲煙來去す。今や我が邦は山間の狹き平地に安きを偸みしが如き、昔時の愚をばふたたびせず、又國を鎖し、海を封ぜし近古の陋をばふたたびせず。膽勇ある邦人は島内にのみ安居するに堪へず、海に親しむ事は日に月に多く成りゆくなり。海國の所産たるに相應する文學は蓋し今日以後に成らむ。（幸田露伴―諷言）

一四　奧の細道

一　出立

元祿二年、奧羽長途の行脚思ひ立ちて、取る物手につかず。股引のやぶれをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸するう

より松島の月まづ心にかかる。彌生末の七日、曙の空おぼろおぼろとして、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、復いつかはと心細し。むつまじき人人に送られて出でたつ。瘦骨の肩に物多きを厭へど、紙子一衣は夜のふせぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ、あるはさり難き贐など、さすがに打棄てがたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

松尾芭蕉

二　松島

抑、ことふりたれど松島は扶桑第一の好風にして、洞庭[1]・西[2]湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江[3]の潮を湛ふ。島島の數をつくして、欹つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ひ、二重に重なり、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめられて、屈曲ことさらに撓めたるが如し。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さむ。雄島が磯に立寄るほど、月、海に映りて、晝のながめ又あらたまる。江上に歸りて宿を求め、窗を開きて風雲の中に旅寢すれば、あやしきまで妙なる心地して眠らむとしていねられず。

三　平泉[4]

三代[5]の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。

(一) 支那第一の大湖、湖南省にありて揚子江に注ぐ。
(二) 支那浙江省にあり。
(三) 支那三江の一、浙江省にあり。
(四) 陸中國西磐井郡にあり。
(五) 藤原清衡・基衡・秀衡。

(一)秀衡が跡は田野になりて、金雞山のみ形を殘す。先づ高館(二)に上れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め夷を防ぐと見えたり。偖も義臣選つてこの城に籠り、功名一時の叢となる。(三)國破れて山河あり城春にして草青みたりと、笠打敷いて時の移るまで泪を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡。(松尾芭蕉—奥の細道)

一五　妹(四)にさとす　上

この間は御文下され、觀音様の御せん米、三日の精進にて頂き候やうとの御事、御親切の御こころざし感じ入り申候。精進・潔齋などは、隨分心の堅まり候ものにて、宜敷事とぞんじ候に付、拙者も二月(五)廿五日より三月晦日まで、少少志の候へば、酒肴など一切斷ち居候。その間一度靈(六)神様御祭の物頂戴致候ばかりに御座候。まして三日の精進はさまで六か敷事にあらず、御親切の事に候へば、相はたし度存候へども、當所にては、當り前の精進の外にまた精進と申候へば、連中又は番人ども何故と怪しみ尋ね候に付、それをそれと相こたへ候事面倒に存候故、八日はさいはひ精進日なれば、その日一日にいただき申候。

(一)文治三年(一八四七)卒す。
(二)義經籠居の城址。
(三)國破山河在、城春草木深。(杜甫)
(四)安政六年四月十三日、松陰長門萩の野山の獄に在りて長妹千代子(後に芳子と改む)に與へたるものなり。
(五)安政六年。(二五一九)
(六)杉氏の祖先の靈を祭れるもの。

＊山口縣の方言にて微塵の意。

そもそも觀音樣信仰せよとの事は、定めし禍をよけ候ためなるべく、これには大いに論のある事に候へば、委細申し進ずべく候。法華經第二十五の卷普門品と申すに、觀音力と申す事高大に述べてこれあり候。大意は、觀音を念じ候へば、繩目にかかり候へば忽ちぶつぶつと繩が切れ、人屋へ捕はれ候へば忽ち錠・鍵がはづれ、首の座に直り候へば忽ち刀が＊ちんぢに折るるなど申してこれあり候。これは、拙者江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故凡人はこれよりありがたき事はなしとて信仰するも無理はなく候。

さりながら佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つに分ちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定めこれあり候。小乘にて申候へば、觀音は右の經文の通りのものと心得、ひたもの信仰せしむる事に御座候。これは大いに信を起さするためなり。信を起すとは一心にありがたい事ぢやとのみ思ひ込み、餘念・他慮なきことにて、一心不亂と申すもこのことなり。人は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うてもちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候ゆゑ、世の中に如何に難題・苦患の來るとも、それに退轉して不忠・不孝・無禮・無道等仕る氣遣はなし。されど初よ

り、凡夫に一心不亂の、不退轉のと申し聞かせても、少しも耳に入らぬものゆゑに、かりに觀音樣を拵へて人の信を起させ候教に御座候。これを方便とも申候。さてまた大乘と申す方にては、出世法と申す事が肝要に御座候。出世と申候うても、立身出世など申す事には御座なく候。その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては我が身も往くさきは老人にならむかと悲しみ、死人を見ては我が身も往くさきは死なむかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたるまでに悲しみを發し、生・老・病・死がこの世の習なれば、是非にこの世を出ねばすまずと、志を立てて、年二十五のとき、位を棄てて山に入り、右の生・老・病・死を免るる修行をしに參られ候。さ候うて三十出山とて、わづか五年の間に、生・老・病・死を免るる事を悟り、生れもせねば老いもせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それより世の人を教化せられたり。これが卽ち出世法なり。故に出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。濟世といふは卽ちこの世の人を濟度することに御座候。さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の、孔子のと申す御方方は、今日まで生きて居らるる故、人が尊みもすれば、ありがたがりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の

座も、前申す觀音經の通りには候はずや。楠木正成とか大石良雄とか申す人は刃物に身を失はれ候へども、今以て生きて居らるるなり。卽ち刀のちんぢに折れたる證據なり。

一六　妹にさとす　下

さて又、「(一)禍福は繩の如し。」といふことを御悟りあるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種、人間萬事塞翁が馬に御座候。拙者など、人屋にて死ぬる事に候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には學問も出來、己のため、人のため、後の世へも殘り、かつがつ死なぬ人人の仲間いりも出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、また如何なる禍の來むも知れ申さず候。勿論その禍の中にはまた福も交り候へども、所詮、一生の間難儀だにせば、先には福あるべし。何の效驗もなき事に、觀音に賴みて福を求むるやうの事は、必ず必ず無益に存候。

尤も右の通りに申候へば、身勝手なる申分、不幸なる申分と御存じあるべきか、ここにまた論あり。(二)易の道は滿盈と申す事を大いに嫌ふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、(三)豔は夭折、(四)敏は啞子、(五)ふざまの惡き樣なるものなれど、あと四人は何れも可なりに世を渡られ、特に

(一)禍之與レ福何異二糾纆一。(漢書賈誼傳)

(二)天道虧レ盈而益レ謙、地道變レ盈而流レ謙、鬼神害レ盈而福レ謙。(易の謙の卦の彖傳)

(三)松陰の第三妹。

(四)末弟敏三郎。

(五)方言、運の意。

(一)杉民治。(二)次妹壽子、小田村素太郎に嫁す。

兄様(一)・そもじ・小田村(二)は兩人づつも子供があれば、不足は申されず。世の中の、六七人も兄弟のある家を見比べよ。これ程にも參らぬ家は多きものぞ。近くはそもじの家にても、高須などにても、兄弟のうちにはふざまの悪き人も隨分あるなり。然れば父母・兄弟の代りに拙者・豐・敏の三人が禍を受くるにこそと思ひ候はば、父母様の御心も濟まるる譯には候はずや。かつ杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、卻て杉が氣遣なるものなり。拙者身の上は前に申す通り、つめが牢死牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分あれど、杉は今にては御父子とも御役にて、何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔山宅にて父様・母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても、

吉田松陰

眞とは思はぬ程なれば、この先五十年・七十年の事をとくと手を組んで案じて見られよ。氣遣なるものにては候はずや。去年も端午に客の多きを、人は「めでたし、めで

たし。」と、嬉しき顏をすれど、拙者は何分先の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場にかがみて、人の知らぬ處にてはひとり落涙したる程の事なりき。

もしや萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し危し。父母樣の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら、山宅の事はよくは覺えて居るまじ、まして久阪などは猶以ての事。されば拙者の氣遣に觀音樣を念ずるよりは、兄弟・甥・姪の閒に、「樂は苦の種、福は禍の本。」と申す事をとくと申し聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝に當ることあり。兄

弟のうちに一人にてもふざまの惡き人あれば、あとの兄弟の心が自然と和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦まじくなるものなり。これより拙者は兄弟の代りにこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代りに父母樣へ孝行してくるるがよし。さすればつづまるところ兄弟中皆よくなりて、はてはては父母樣の御仕合せ、また子供が見習ひ候はば、子孫の爲これほどめでたき事はなきにあらずや。よくよく御勸辨候うて、小田村・久阪なんどへもこの文御見せ、佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりとをりをり御見候へかし。心學本に、

のどけさよ、ねがひなき身の神まうで。

神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。

（吉田松陰―俗簡襍輯）

一七　感化の力

一代の生命が次代に傳はると共に、感化も亦次代に傳はる。蓋し感化は意志の力にして或は生命よりも強し。人は肉體に於て死すとも、感化に於て死せざるなり。

朝に生れて夕に死する嬰兒あり。彼は眞に死したるか、曰く、必ずしも死せず、感化に於て活く。彼や此の世に亡しと雖も、其の姿は愛らしき面影と共に母の胷中に棲めり。其の母眼を開けば、かれ母の眼前に浮び、眼を閉づれば夢寐に入るにあらずや。之を無意味なりと思ふなかれ、感化力の實體はこの者なり。この者の有るが爲に、母の心が影響を受くるは幾ばくなるを知るべからず。或時は之が爲に慈悲の心を發し、或時は同情の涙を濺ぎ、身に對し、人に對し、結果より結果を生じて、その影響緜緜として盡くること無し。嬰兒猶然り、況や嬰兒以上をや。

子無き人と雖も深く患ふるを要せず、分殖して自己の爲りたる命は、自己といふ一枝に於て次代に傳はらずと雖も、大にして之を觀れば、一切の生命皆自己と分身にして一體なり。一體に於て次代に傳はるなり。自己は須く感化を以て

*豹死留レ皮、人死留レ名。(王彦章畫像記)

永存せむことを期すべし。兒ある人が我が兒を感化する時間は、兒無き人が廣く同胞を感化する時間たるべし。

人は人を感化せむと勉むるのみが感化の手段なるに非ず。日常の一擧手・一投足・一顰・一笑、總て感化力あり。故に何人も常に思はざるべからず、自己其の者が感化力の中心點にして、間斷無く感化力の波を八方に發射しつつあることを。

吾人は生命に於て一體の生命と繫がり、感化に於て社會一體の思想と繫がる。吾人は生命に於て不死なり、感化に於ても亦不死なり。

豹*は死して皮を留め、士は死して名を殘す。これ吾人の受けたる教訓なり。然れども名を遺すは小事のみ、唯感化を遺すを大事と爲す。今日の吾人は、過去一億年來の代代の感化力の爲に今日の吾人たるなり。吾人の新に得たる所のものは、復感化として後に傳へざるべからず。古の聖賢死して百千年を經るも、今猶吾人の理想に入り、吾人を鼓舞し、吾人を奮發せしむ。感化は實に物質以上の力なり、靈氣なり。

吾人は自己の生命の短きを恨むべからず。人生の五十年は十二分の長時間なり。古來聖賢の死後千歳を照すが如き赫灼の偉勳は、必ずしも五十年に渉らず、十年なるもあり、五年なるもあり、短きは單に分秒時の決斷のみ。嗚呼、身命の長短は言ふに足らず、吾人は唯當に感化の力を以て不朽なるを勉むべきのみ。人生は吾人に生命一體の向上主義を教へ、

向上主義は吾人に須くかくの如くなるべきを命ず。生命を離れて人生なく、人生を離れて箇人なし。箇人豈に眼を自己以上に放ち、自己以上の歸趣を以て自己を指導し、自己を以て自己以上のものに盡すことを爲さずして可ならむや。人生の意味は明白に是なり。（黒岩周六―天人論）

一八　猛虎の説

朝鮮の北方今尙虎多く、土人漫に山中に入るを難んじ、偶、入らむとする、必ず大いに警戒を加へて行く。されどその一たび捉へられて檻に在り、衆人の觀覽に供せらるるに及び、誰かこれを畏るるあらむ。環視して戲弄し、咆哮せしめて笑ひ興じ、婦人・小兒亦喜びてこれを觀、相和して共に大いに笑ふ。虎たるや全く一なるも、しかも勢力の隔絶するかくの如く甚し。而してこれ豈に人事に視るべきに非ずや。資性溫和、羣居して他と伍し、敢て先を欲せざる者は苟も安んじて可なるも、自ら豪傑の士を以て居り、もしくは豪傑の事を成さむとするの念ある、大いにこの邊に考ふるあるを要す。同じく倜儻非常の人、しかも居る所の地位已に便、能くその猛氣を養ふを得る時に、奮ひ起りて大いに叫び、世皆慴伏して畏憚せざる無きも、一旦據る所を失ひて他の權內に歸し、或は制縛せられて力を伸べえざる、如何に大言壯語するも、唯憫笑を來すのみ。范增*の項羽に疑はれて憤怒し、「天下の事大い

*項羽の臣。

（一）蘇東坡。
（二）義帝、宋義に命じて上將たらしめき、これを卿子冠軍と號す。
（三）漢の高祖。

に定まる。願はくは骸骨を賜はりて卒伍に歸せむ」といへる、豪傑の氣槩以て想ふべし。しかも論者（一）はその去るの早からざりしを憾みて曰ふ、「羽の卿（二）子冠軍を殺すに方り、增、羽と肩を比して義帝に事ふ。君臣の分未だ定まらず。增の爲に計る、力能く羽を誅すれば則ちこれを誅し、能はざれば則ちこれを去る、豈に毅然たる大丈夫にあらずや」と。既に羽を誅する能はず、卻て臣事す。後に迨びて大いに怒れりとて、少しの效ある無し。假令その人は虎の資にして虎の力を兼ぬるにせよ、既に巳に制縛せられて他の命を待つ。大いに咆哮すとも、唯愚癡に見ゆるに過ぎず。但し爾く制縛せられしも、尚漢（三）高の爲に畏れ憚られ、これ有るが故に楚を重からしめたり。楚を去りて後、疽背に發して途に死したる、尚人傑たるを完くせり。若しこれをして壽にして健、更に漢高に臣事して善く任用せられしとする、或は大いに用を成せしも測られざれど、その世に侮らるる一層甚しかりしならむ。

虎の虎たるは山野に自由を得るに存す。「猛虎一聲山月高。」凄壯の情景、神に入るとすべきも、しかもこれその出沒自在、一嘯して風を起すの槩あればなり。捉へて檻中に投ぜらるるや、百聲・千聲するも少しも凄壯を感ぜしめず、煩悶・喚叫すとても憐愍を惹くべきのみ。虎の虎たる威力を顯さむとする、必ず山野に於てせざるべからず。深山に蹲踞し、曠野に彷徨するに當りては、極目みな支配の下に在り。動かむと欲し

(一)清盛の繼母。
(二)治承四年(一八四〇)平維盛、富士川の水禽に驚いて潰走す。

て得ざる莫く、成さむと欲して能はざる莫し。以て滿山を震搖し、百獸を懾伏せしむるに堪ふ。故に古來豪傑の、束縛を撤せられて大いに伸ぶるの機會を得る、人これを目して「虎を野に放つが如し」といふ。賴朝の平治の亂に敗れて俘囚と爲れる、寔に眇たる可憐兒、死生ただ平氏の掌裏に在り。池(一)禪尼の百方助命に黽めし時、ただその憫むべきを見しに、死を免れて伊豆に流さるるに及び、人指して虎を野に放つが如しとせり。虎視耽耽幾年の閒、果して八州の野皆これに靡く。遂に大いに興りて西向嘯呼する、京畿の山河これがために震撼し、水(二)禽の騷げるさへ、なほ平氏の軍を潰走せしむるに至れり。

(三)加藤清正。
(四)福島正則。
(五)豐臣秀吉の子。
(六)德川二代將軍。
(七)慶長五年。(二二六〇)

加(三)藤・福(四)島は驍勇無比と稱せらる。一たび馬に鞭ちて前進する、向ふ所披靡せざるなく、而して常に忠を豐臣氏に盡し、嘗て他を以てこれに代ふるの念なく、死生替らざらむ事を誓へり。清正の短刀を懷にして秀(五)賴に扈し、京都に赴ける、實に切死の覺悟なりき。正則亦秀(六)忠に勸むるに秀賴を蔑にすべからざるを以てせしが、當時德川氏の眼中既に二人なし。關(七)が原の役よりして、疾くこれを制縛し、藉りて以て己が用を爲さしめたり。如何に戰鬪に長ぜるも、能く爲すこと有るに足らずと知らる。故に天下統一して後、その跡脆くも斷絕せり。

學者として位置を作れる者亦これと同じ。德川氏の歷史

(一)初め大洲侯に事へしが、辭して近江にをる。(二二六八—二三〇八)

(二)京都堀川にをる。

(三)初め池田光政に仕へ、又木下信之にも仕へしが、晩年幕府に上書して禁錮せらる。

(四)太宰春臺。(二三四〇—二四〇七)

が、政事家の歷史たるよりも、寧ろ學者の歷史たるは、その學者に頗る重んずべき者ありしの致せる所。中江藤樹(一)・伊藤仁齋(二)共に布衣、熊澤(三)蕃山祿を得て仕へしも、もと明君の知遇に感じて一藩の政治を改革し、延いて天下の勢を變ぜむとしたるもの、全く失敗に終りしと雖も、單に斗米に意なかりしや明白。これを外にして、大儒の稱ある者にして能く五百石を受けしは極めて少なく、(四)春臺の若き、尙二百石にて甘んぜむとしたり。蓋し學者の意氣俸祿の上に存せず、道を以て任としたるなり。刻苦・勤勉の常ならざりしより觀る、數百石の俸祿は甚だ少なしといはざるを得ず。久しき準備を以て、僅かの報酬に安んず、是その根柢の鞏くして世に伸ぶるを得る所以。林氏(五)は殆ど萬石の身分なりしかど、しかもその然ると共に、併せて學者たるの力を喪ひ、後多く言ふに足る者なかりき。固より幾多の學者卑しむべきもの少なからず。東脩をこれ求め、祿仕をこれ欲し、奔競して售るに急に、隨ひてその位置愈、低下し、幇間に類せるものあり。その地位の一般に低かりしは寧ろ當然なりとす。

今時、學者・文士にして往往言を立つる者あり。而もその言を立つる、專ら己の位置を顧み、譴責を被るの恐ある、則ち非を知りても知らざるまねし、時には僞飾してその非を蔽はむと勉む。しかもなほ好みて慷慨の辭を騁せ、憤世の言を作さむとす。かくの若きは抑、如何にか視るべき。斯かる慷慨と

(五)林羅山の後、世〻幕府の儒官たりき。

憤世とは、恰も野師に使はるる虎の咆哮すると同じからずや。咆哮や眞の咆哮なりとも、勢や全く異なり。焉ぞ深く考ふる所無かる可けむや。

人は固より虎に非ず。徒に咆哮・搏噬するは不可、宜しく互に協同せざるべからずと雖も、協同の中また自ら自由の氣性を養はずんばあるべからず。秩序を貴び、禮儀を正しくするは素と社會に缺くべからざるも、自ら信ずるの篤きものは、また各〻その性に應じて分別すべく、而して性を稟くる虎の如き者、亦必ず虎の如き生活を要すべし。世「竹に虎」といへど、虎を捉へて二三竿の中に置くとて、何の觀るべきある無し。獨り巨竹萬箇雲を挐む處、巨虎巧みに竹を避けて飛行す

るに至りては、その斑毛の鮮麗なる、行動の迅快なる、皆これに伴ひて趣味を添へ、自ら言ふべからざるの美觀を呈す。虎質なる者茲に察すべし。（三宅雪嶺—偉人の跡）

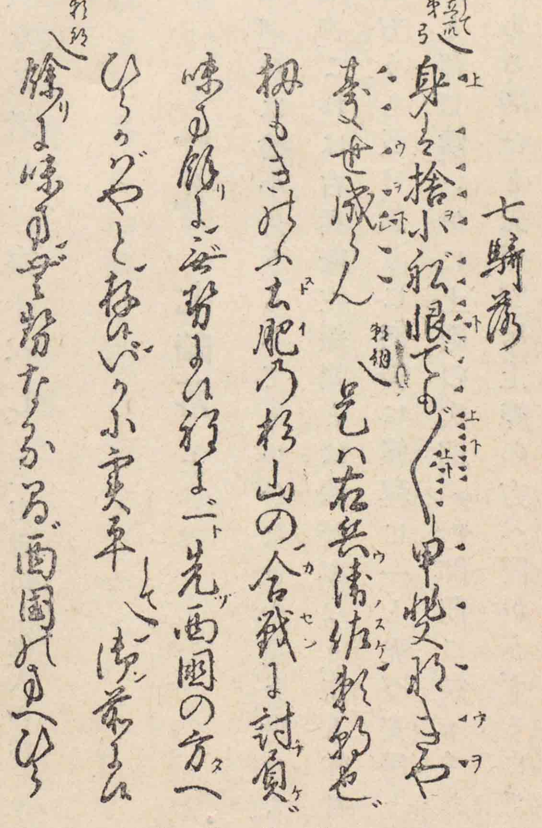
(一)相模國足柄下郡の東端にあり。治承四年(一八四〇)源頼朝大庭景親と、この地に戰つて敗走す。
(二)土肥實平。

一九　七騎落　上

一同「身は捨小舟うらみても、かひなきや憂き世なるらむ。
頼朝「これは右兵衛佐頼朝とは我が事なり。扨も昨日石橋山(一)の合戰に身方うち負け、餘りに無勢に候程に一と先づ安房・上總の方へ開かばやと存じ候。いかに(二)土肥の次郎。
シテ實平「御前に候。
頼朝「あまりに味方無勢にある間、ひと先づ安房・上總の方へ開かうずるにて有るぞ。急いで船の事を申し付け候へ。
シテ「畏つて候。とくより御船の事を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。

（一）冠者信綱。（二）氏忠。（三）宗遠

頼朝「いかに實平。シテ「御前に候。頼朝「唯今船中に供したる人數は如何ほどあるぞ。シテ「さん候。ただ七騎御座候。頼朝「さて頼朝まで八騎よな。



七騎落謡本

きつと思ひいだしたる事あり、祖父爲義鎭西へ開きし時も八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎。思へば不吉の例なり。實平はからひて船より一人おろし候へ。シテ「畏つて候。

實平おほせ承り、船のせがいに立上り、御供の人數を見渡せば、まづ一番には田代殿。（一）地「さて二番には新開の次郎。（二）シテ「又三番には（三）土屋の三郎。地「四番には（四）土佐坊。五番には。シテ「實平候。六番には遠平。遠平「同じく遠平。シテ「艫板には、（五）義實義實あり。地「この人人は君の爲、龍門原上の土に屍をば曝すとも惜しかるまじき命かな。何れを選び出さむと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。

頼朝「いかに實平、何とて遲きぞ。急いでおろし候へ。シテ「畏つて候。いかに岡崎殿に申し候。岡崎「何事にて候ぞ。シテ「君よりの御諚にて候。急いで御船より御おり候へ。義實「なんと某に御船より下りよと候や。シテ「なかなかの事。義實「暫く、この御供の内に某一の老體にて候程に、かひがひしく御用にも立つまじき者と御覽じ限られて、かやうに承り候な。その儀に於ては御船より下り候まじ。シテ「いやいや、さやうの儀にてはなく候。艫板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實「いや、所詮この船中に命二つ持ちたらむずる者を御船より下され候へ。シテ「これは不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂れの候か。シテ「さん候。某

（四）正尊。（五）岡崎四郎

＊股野五郎景尙。

も昨日迄は命を二つ持ちて候を、早や一つの命をば我が君に參らせ上げて候。シテ「さてその謂れは候。義實「その事にて候。昨日石橋山の合戰に、子にて候眞田の與市義忠は、副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體、二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ、この御船に親子一所に渡られ候へ。御分殘つて遠平を下すか、遠平を殘して御分おるるか、親子の内、一人おりられ候へ。シテ「尤もにて候。餘りの道理に、物なのたまひそ。

いかに遠平、君よりの御諚にて有るぞ、急いで御船より下り候へ。遠平「何と御船より下りよと仰せ候か。シテ「中中の事、急いで下り候へ。遠平「遠平幼く候へども、君の御大事に立たむこと、誰にか劣り候べき。御船よりは下りまじく候。シテ「こざかしき事を申す者かな。君の御爲、父が命にてなきか。急いで御船より下り候へ。遠平「いやいや、君の御爲、父の命をば背くとも、御船よりは下りまじく候。シテ「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲、父が命をば背くとも下りまじきと申すか。その儀ならば人手には掛けまじいぞ。義實「暫く、これは君の御門出なるに、過りたるか、實平。實平「いづこまでも某が過りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさむより、某御船より下りうずるにて候。

遠平「いかに申し候。さらば某御船より下り候べし。シテ「何と下りうずると申すか。實に實に今こそ某が子にて候へ。あれを見よ、敵大勢討出でたり。構へて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名殘こそ惜しけれ。

かくて我が子をおろし置き、實平御船に參りけり。地「ゆゆしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別痛はしや。遠平「父の別は申すに及ばず、君を始め參らせて、皆人人に御名殘こそ惜しう候へ。地「かの松浦佐用姫が、唐土船を慕ひわびて、渚にひれ伏しし有樣も、今遠平が親と子の、別にかはらじと、皆涙をぞ流しける。遠平「契ほどなき早船を、暫しとだにも言ひあへず、跡を見送りたたずめば、地「はや遠ざかる浦の波、たち別れゆく有樣を、遠平「餘の人人は心して、地「あはれみあへる　遠平「船の内に、地「實平はひたすらに弱氣を見えじとて、中中かへり

見おこせもせで、心強くも行く跡に、敵大勢見えたり。すはや遠平は討たるるとて、頼朝もあはれみ陸を見給へば、さすがげに、恩愛の契もただ今を限ぞと思ひ實平は磯邊に向ひ、人知れず、心のままにならば、あはれ遠平と一所に、討死せばやとあこがれて、飛立つばかり思ひ子の、わかれぞあはれなりける。

二〇　七騎落　下

ワキ義盛「弓張月の西の空、行くへ定めぬ船路かな。

狂言船頭「沖なる波の音までも、鬨の聲かとおそろしや。ワキ「あれに見えたるが御座船にてありげに候。急いで船を漕ぎ候へ。

狂言「畏つて候。

シテ「如何に申し候。あれに兵船一艘見えて候。先づ此方より詞をかけうずるにて候。義實「然るべう候。シテ「如何にあれなる船はたれが召されたる御船にて候ぞ。ワキ「我もそなたの船影をあやしく思ひやすら

ふなり。そも誰人の船やらむ。シテ「これは土肥の次郎實平が乘つたる船にて候よ。ワキ「何と土肥殿の御船と候や。シテ「中中の事。さてその御船は誰が召されたる御船にて候ぞ。ワキ「これこそ和田の小太郎義盛が乘りたる船に候よ。シテ「さては和田殿の御船にて候か。ワキ「中中の事。内内申し通ぜし如く、御身方に參らむために、これまで參りて候。さて君はその御船に御座候か。シテ「和田殿は内内申しあはせたる事の候間、唯今參りて候。さりながら先づたばかつて心を見うずるにて候。如何に和田殿へ申し候。これまでの御參りめでたう候。さりながら面目もなき事候。昨日の暮程より我が君を見失ひ申し、かやうに浮かれ船となつて尋ね申し候よ。ワキ「何と君はその御船に御座なきと候や。

シテ「さん候。ワキ「言語道斷の事にて候ものかな。われ身方をば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝には離れ申し、この上は命ありても何かせむ。いでいで自害に及ばむと、腰の刀に手をかくる。

シテ「あゝ暫く、君はこの船に御座候。ワキ「何と、君はその船に御座候や。

シテ「中中のこと。ワキ「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ「これは戯れごとにて候。幸に陸近う候程に、その船をも寄せられ候へ。御船をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。シテ「心得申し候、さらばやがて參らうずるにて候。

シテ「如何に申し候、御前にて候。ワキ「我が君を見奉りて、今は安堵仕りて候。シテ「實に實に尤もにて候。ワキ「如何に土肥殿に申し候。シテ「何事にて候ぞ。ワキ「この御供の内に、何とて御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ「その事にて候。さる謂れあつて陸に殘し置きて候。ワキ「とくよりかくと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡させられ候その返報に、今迄はかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さむと、隱し置きたる船底より、遠平を引立て見せければ、シテ「その時實平あきれつつ、地「夢か現か、こは如何にとて、覺えず抱きつつ泣き居たり。たとへば仙家に入りし身の、半日の程に立ちかへり、七世の孫に逢ふ事の、譬も今に知られたり。

ワキ「如何に義盛に申し候。さてこの者をば何として召しつれられて候ぞ。ワキ「さん候、これまで伴ひ申したる謂れを御前にて申し上げうずるにて候。シテ「急いで御物語候へ。

ワキ「さても昨日石橋山の合戰破れしかば、大庭が手勢君を討ち奉らむと、大勢渚に討つて出でたりしに、某も一緒に討つて出でしが、汀を見れば、引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒駈寄せて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし、船底に乘せ申し、これまで伴ひ參りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ。シテ「かかる有り難き事にこそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて、落涙仕りて候を、さぞ人人の不覺の涙とや思し召すらむ、さりながら、

地「うれし泣き涙は何に包まむ唐衣、日も夕暮になりぬれば、月の盃とりどりに、シテ「主從ともに悅の、地「心うれしき酒宴かな。

ワキ「如何に實平、餘りにめでたき折なれば、一さし御舞ひ候へ。シテ「さらばそと舞はうずるにて候。

地「心うれしき酒宴かな。(實平立つて舞ふ)
かくて時日をめぐらさず、國國の兵馳參ずれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつつ、掌に治め給へるこの君の御代のめでたき始も、實平正しき忠勤の道にいる、弓矢の家こそ久しけれ。(謠曲)

二一　兼平最期

去年(一)六月に、木曾(二)、北陸道を上りしには五萬餘騎と聞えしに、四(三)宮河原を落ちけるには、只七騎には過ぎざりけり。粟津(四)の軍の終には、心は猛く思へども、運の極みの悲しさは、主從二騎になりにけり。木曾、鐙踏ん張り弓杖つきて今井(五)に向ひ、「日頃は何とも思はぬ薄金が、などやらむ重く覺ゆるなり。」といへば、兼平、「何條さる事侍るべき。日頃に金もまさらず、別に

(一)壽永二年。(一八四三)
(二)源義仲。
(三)山城國宇治郡。
(四)近江國滋賀郡。
(五)今井兼平(

重き物をも附けず。御年三十七、御身盛りなり。身方に勢なければ臆し給ふにや。兼平一人をば、餘の者千騎・萬騎とも思しめし候べし。終に死すべきもの故に、わるびれ見え給ふな。あの向ひの岡に見ゆる一むらの松の下に立寄り給ひて、心靜かに念佛申して御自害候へ。その程は防矢仕りて、軈て御伴申すべし。あの松の下へは、廻らば三町、すぐには一町にはよも過ぎ侍らじ。急ぎ給へ。」と、泣く泣く、涙を押へ口說きければ、木曾は名殘を惜しみつつ、「都にて如何にもなるべかりつれども、ここまで落來つるは、汝と一所にて死なむとなり。いづくまでも同じ枕に討死せむと思ふなり。」といへば、今井、「いかにかくは宣ふぞ。君自害し給はば、兼平則ち討死なり。これを

*一八四四。

こそ一所にて死ぬとは申せ。兵の剛なると申すは最期の死を申すなり。さすが大將軍の宣旨を被る程の人、雜人の中に打伏せられて首をとられむこと心憂かるべし。疾く疾く落ち給ひて御自害あるべし」と、勸めければ、木曾誠にと思ひ、向ひの岡の松を指して馳行きけり。今井は木曾を先立てて、引返し引返し、命も惜しまず戰ひけり。木曾は今井をふり捨て、駿に任せて歩ませ行く。

頃は元暦*元年正月廿日の事なれば、峯の白雪深くして、谷の氷も解けざりけり。向ひの岡へ筋違にと志す。つらら結べる田を横に打つ程に、深田に馬を馳入れて、打てども打てども行かざりけり。馬も弱り、主も疲れたりければ、とかくすれども甲斐ぞなき。木曾は今井や續くと思ひつつ、後を見返りたりけるを、相模國の住人石田小太郎爲久が能つ引いて放つ矢に、内冑を射させて、眞額を馬の頭に當てて、うつぶしに伏しにけり。爲久が郎等二人馬より飛んで下り、深田に入つて木曾を引落し、やがて首をぞ取りてける。

今井これを見て、今ぞ最期の命なる、急ぎ御伴に參らむとて、進み出でて申しけるは、「日頃は音にも聞きけむ、今は目にも見よ。信濃國の住人、中三權頭兼遠が四男、朝日將軍の御傅子(めのとご)、今井四郎兼平なり。鎌倉殿までもしろしめしたる兼平ぞ、首取つて見參に入れよや」とて、數百騎の中に駈入つて散散に戰ひけれども、大力の剛の者なりければ、寄つて組むもの

はなし、ただ開いて遠矢にのみぞ射ける。されども鎧よければ裏かかず、あきまを射ねば手も負はず。兼平は箙に殘る八筋の矢にて八騎射落しけり。太刀を拔いて申しけるは「日本一の剛の者、主の御伴に自害する、見習へや、東八箇國の殿原。」とて、太刀の鋒、口にくはへ、馬より逆樣に落ち、貫かれてぞ死にたりける。（源平盛衰記）

二三　先帝御入水

源平の兵ども互に面もふらず、命も惜しまず攻戰ふ。されども平家の身方には、十善帝王三種の神器を帶してわたらせたまへば、源氏如何あらむずらむと危く思ふ所に、しばしは白雲かとおぼしくて虛空に漂ひけるが、雲にてはなかりけり、主もなき白旗一旒舞ひさがりて、源氏の船の艫に、竿つけの緒のさはる程にぞ見えたりける。判官、これは八幡大菩薩の現じ給へるにこそと悅びて、兜をぬぎ、洗手・洗口して、これを拜し奉り給ふ。兵どもも皆斯くの如し。又沖よりいるかといふ魚一二千はひて平家の船の方へぞ向ひける。*大臣殿小博士晴信を召して「いるかは常に多けれども、未だかやうのことなし。屹度考へ申せ。」と宣へば、「このいるか、はみかへり候はば、源氏亡び候ひなむず。はみ通り候はば、身方の御軍危くおぼえ候。」と申しもはてぬに、平家の船の下を、すぐにはひてぞ通りける。世の中は今はかうとぞ見えし。阿波の民部重

*平宗盛。

平宗盛。

能は、この三箇年が間、平家に附きて忠を致したりしかども、子息田内左衛門教能を生捕にせられて、今は協はじとや思ひけむ、忽に心がはりして、源氏と一つになりにけり。新中納言知盛卿「あつぱれ、重能めを斬つて捨つべかりつるものを。」と後悔せられけれども、かひぞなき。

平家の方の謀には、よき武者をば兵船に乘せ、雜人原をば唐船に乘せて、源氏心にくさに唐船を攻めば、中に取りこめて討たむと支度せられたりしかども、重能が反忠の上は、唐船には目もかけず、大將軍のやつし乘り給へる兵船をぞ攻めたりける。その後は四國・鎭西の兵ども皆平家を背いて源氏につく。今まで從ひ附きたりしかども、君に向ひて弓を引き、主に對して太刀をぬく。かしこの岸に著かむとすれば、波高くして協ひがたし。ここの汀に寄せむとすれば、敵矢先を揃へて待ちかけたり。源平の國爭ひ今日を限とぞ見えたりける。

さる程に源氏の兵ども平家の船に乘移りければ、水主楫取ども、或は射殺され、或は斬殺されて、船をなほすに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。新中納言知盛卿小船に乘つて、急ぎ御所の御船へまゐらせ給ひて、「世の中は今はかうとおぼえ候。見苦しき者どもをば皆海へ入れて、船の掃除めされ候へ。」とて、掃いたり、拭うたり、塵ひろひ、舳艫に走り廻りて手づから掃除し給ひけり。女房達「やや、中納言殿軍のさまは如何

(一)清盛の妻。
(二)安德天皇。

にや、如何に。」と問ひ給へば、「今はともかくも申さむやうなし、かねて思ひ設けしことなり。」と答へ給ひければ、女房達は聲聲にをめき叫び給ひけり。

二位殿(一)は日比より思ひ設け給へることなれば、鈍色の二衣打ちかづき、ねり袴のそば高くとり、神璽を脇に挾み、寶劍を腰にさし、主上(二)を抱き參らせて、「我は女なりとも敵の手にはかかるまじ。主上の御供に參るなり。御志思ひ給はむ人人は急ぎつづき給へや。」とて、しづしづと舷へぞ歩み出でられける。主上は今年八歳にぞならせおはします。御年の程より遙かにねびさせたまひて、御かたちいつくしう、傍も照輝くばかりなり。御髪黑く、ゆらゆらと御脊中過ぎさせ給ひけり。

主上あきれたる御有樣にて、「抑、あまぜ、われをば何地へ具して行かむとはするぞ。」と仰せければ、二位殿幼き君に向ひ參らせ、涙をはらはらと流いて、「君は未だ知し召され候はずや。先世の十善戒行の御力によりて、今、萬乘の主とは生れさせ給へども、惡緣に引かれて御運既に盡きさせ給ひ候ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎に預らむと誓はせおはしまして、御念佛候べし。この國は粟散邊土と申してもの憂き境にて候。あの波のしたにこそ、極樂淨土とてめでたき都の候。それへ具しまゐらせ候ぞ。」と、樣樣に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼ

れ、小さく美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮・正八幡宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱きまゐらせて、「波の底にも都のさふらふぞ」と慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかなや、無常の春の風忽に花の御姿をちらし、いたましきかな、分段の荒き浪玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて長きすみかと定め、門をば不老と號して老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歳のうちにして、底の水屑とならせおはします、十善帝位の御果報、申すもなかなか愚かなり。雲上の龍下りて海底の魚となり給ふ。大梵高臺の閣の上、釋提喜見の宮の中、古は槐門・棘路の間に九族を靡かし、今は船の內、波の下にて、御身を一時に亡ぼし給ふこそ悲しけれ。（平家物語）

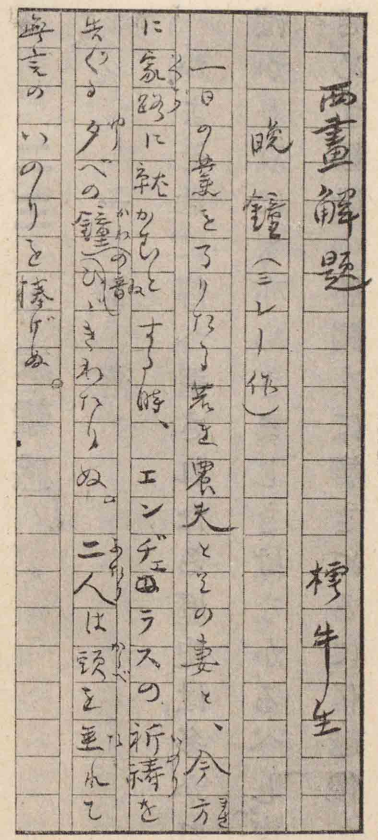
二三　平家雜感

一　都落

およそ世に傳へ遺されたる歷史は多かれど、平家の都落(一)ばかり哀にも亦めざましきはなかるべし。南都(二)の餘燼未ださめず、墨股(三)の勝鬨なほ響きぬるに、信・越俄かに雲亂れて、木曾の五萬騎、はや比叡(四)のあなたに充ち滿ちぬ。宇治・淀の備もろくも潰えて、都も今を限とぞ見えし。あはれ、一門の天下、身を置くに處なし。世はかく憂きを、み吉野(五)の山のあなたにも

(一)壽永二年七月。
(二)治承四年（一八四〇）二月、平重衡、奈良を攻めて、東大寺等を燒く。
(三)養和元年（一八四一）三月、平知盛等、源氏を美濃の墨股川に破る。
(四)壽永二年七月義仲、叡山に據る。
(五)みよし野の山のあなたに宿もがな、世のうき時のかくれがにせむ。（古今集、讀人知らず）

かくれがは無きか。いざさらばやみなむ。都の中にていかにもならむよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍ばまし。あはれ生死も知らぬこの別れ路再び歸り來べき都ならねばとて、六(一)波羅・池殿(二)・西(三)八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京・白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬるこそあわただしかりしか。



高山樗牛筆蹟

ここに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜夜かなしむ。保元

(一)(三)清盛の第。
(二)平頼盛の家、治承の頃高倉上皇の御所なりき。

このかた天下の榮華をつくしたる花の都の古里を燒野(四)の原と顧みて、末は煙の浪、雲の浪、行方も知らずさすらふらむ。直衣・束帶の身にも、今は黑金の衣をつけたれど詠歌の餘哀に狃れて、弓矢の譽を勵まむ心ちせず。さても棄て難き命や。今こそはうき世なれ。さすがにしのばるる昔の樣の夢に入るをばいかにかせむ。翠華搖搖として西に向へば、秋風到る處の野に滿てり。嗚呼、きのふは東關のもとに轡をならべて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘人、行方の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて心を傷ましむるもののみなり。月の出でくる山のはをあなたの空とや思ひけむ、日暮舳に立ち

(四)ふる里を燒野のはらとかへり見て、末も煙の波路をぞ行く。(平經盛の歌)

て(一)笛吹く人あり。響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳を敧つ。嗚呼、この時この人の懷、果して如何。

二　清盛入道

世にもあはれなるは平家とぞいふめる。げに、この一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及びがたきなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて百年の計を思はず。今や秋の嵐のふき荒ばむずる朝も、春の夜の夢なほ朧にして、覺めての後はさすがにうき世と觀ずれども、先世・後代既に梭をかへたるをいかにかすべき。今を昔にかへさむすべもかた絲のよりくづれたる世こそ、かへすがへすも是非なけれ。

されば風雅にかくれては、(二)一題の遺詠に今生の本懷を終へ、(三)恩愛にほだされては、己身の現在に來世の果報をおもはず。あはれは桐の一葉に散りそめて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。思へば、怪しきまでにあはれなりける運命かな。

さるにても(四)入道相國の生涯こそなかなかに面白かりけれ。弓矢のいさをしはや畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封全國に渡りて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗皆ここに集まれり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今はこの人ならでは人にあらじと唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、(五)京師の長吏これが爲に目をそばだつるばかりなり。されば十善の帝王かしこくも外戚の威におされ給ひて、八幡・賀茂の御幸は八重

(一) 壽永二年十月平清經、月夜に笛を吹いて海に投ず。

(二) 忠度のこと。

(三) 維盛のこと。

(四) 平清盛。(一一一八—一一八一)

(五) 陳鴻の長恨歌傳、楊氏の勢力を敍したる條に、「京師長吏、爲ㇾ之側ㇾ目。」

(一)淸盛の信仰篤かりし安藝の嚴島神社。
(二)治承三年、後白河法皇を鳥羽殿に幽し奉る。
(三)治承四年、福原に遷都す。

の潮路の嚴島(一)とぞ觸れられける。何某の卿が、「入る日をも招きかへさむずる勢」と書かれしも、げにことわりと覺ゆ。

平淸盛

不敵なる入道は、私門の榮えにあき足らで、世に人もなげに振舞はれけるこそゆゆしけれ。ここに卿相・雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南(二)の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代の帝座(三)俄かに動きて、愛宕の里のあはれをとどめけるこそ、なかなかにあさましかりしか。

(四)重盛の男。(一八二〇—)
(五)叡山と奈良。

咲きも殘らず、散りも始めぬ櫻花、嵐なくとも、かくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛(四)、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀・帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水鳥に算を亂しし十萬餘騎は、徒に長き世の笑をとどめたるに過ぎず。加ふるに北土俄かに雲亂れて、木曾の山氣漸く都に逼り、兩山(五)の衆徒また既に反覆の色をしめしぬ。平家の運命日にますます急なり。

時しも入道は病にかかりぬ。あはれ、病の牀のさびしきに、霜夜の鐘の響の枕に沈む時、安藝守の昔より太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を靜かに憶ひ出でたる時、しか

(一)保元・平治。

(二)內大臣平重盛、小松殿と稱す。(一七九八―一八三九)

(三)眼耳鼻舌身意の六根の慾。

して命の際の身ぞと觀じたる時、彼果して如何の感慨をか催しけむ。一代の榮華身に餘りて、保(一)平のいさをしまたいふに足らずと思はざりしか。おのれにつらかりし人人をかくまでに惱まし事の、罪深かりきとは思はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁して法皇を幽閉しまゐらせしことの、中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小(二)松の內府が、身命にかへて乃父の罪業を救はむとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたた悔恨の心を動かすことなかりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六(三)慾煩惱の絆を離れむずる大事のきはに、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆あらず、入道は死に至るまでその初念を飜すことなく、正にその生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはく、「兵衞佐賴朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事・孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。いそぎ討手を下し、かれが首を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞ今生・後世の孝養にてはあらむずる」と。一念の執著に必衰の運命をものともせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いむことを必せり。その事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻してかれが頭にかくとも、なほこの一我をいかにともすること能はざ

らむ。六尺の眇軀、ここに至れば天地の大にも比ぶべく、運命我において浮塵にひとしからむ。所謂死(一)してしかして生けるものといふべきか。（高山林次郎——樗牛全集）

二四　川柳點

武者一人叱られてゐる土用干。
轉寢の顔へ一册屋根にふき。
大水は器物にはしたがはず。
本降りになつて出て行く、雨やどり。
我が頬を撫で撫で刷毛を借りて行き。
里芋の本阿彌(二)、下女が罷りいで。

(一)古ローマのキケロ、その友スキピオの死を弔して曰く、「死せりと雖も猶生く。」と。
(二)刀劍等の鑑定家。

屛風の詩、聞けば主人も相識(三)らず。
「千客萬來」皆來ると困るなり。
「あしたでも剃つてくれよ。」と飛車がなり。
飛車・角のみんな成りこむ一の谷。
その暗さ、早太(四)櫻につき當り。
源(五)左衞門鎧を著ると犬が吠え。
「釣れますか。」などと文王側へ寄り。
朝(六)顔の蔓をひつ切る中たがへ。
「よう降るぢやないか。」と殿もお次まで。
見世物にしたい白(七)髪を詩につくり。

(三)主人不二相識一、偶坐爲二林泉一。（唐詩選）
(四)鵺退治の猪早太。
(五)佐野源左衞門常世。
(六)朝顔に釣瓶とられて貰ひ水。（加賀千代の句といふ）
(七)白髪三千丈、縁レ愁似レ箇長。（唐詩選）

二五　清林和尚

見しは今下總の國小弓の大巖寺は淨土宗關東第一の學寺たり。先年この寺に安譽和尚と申す名匠ましまし、五百人の所化を集めて法幢を執り給ひぬ。中に清林といふ所化、才敏にして一事を聞いて萬事を知る。學問世に勝れて、文殊の智慧・德相を得たりといひならはす。法問の時に至つて、この寺の番頭を始め老僧達、牙を嚙んで此の清林と論談すと雖も、清林佛祖の妙文・明句を取つてあはせ、一問答に押しつむる。或時は孔・孟・老・莊の金句を以て答へ、或時は世俗の言葉、目前の境界を以て示し、狂言綺語を以てあやなし、言葉に花を咲かせ、理に珠を聯ぬ。布留那の辯を振ふ事以て譬ふるに足

らず。故に老僧達嗔恚を起し、「それ智者は其の功を建てむ事を願ひ、威名を四方に達せむとするに、彼の清林一人此の寺にある故、我等が二十年三十年の修行も空しく埋もれ、見佛・聞法の人に無智に思はるる事の無念さ、口惜しさよ。如何にもして寺中を追拂はばや。」と罵りあへり。

或時、一老と清林と言葉咎して諍ふ。一老心いらだちて、「あの箍師入道め。」と惡口すれば、清林も腹こそたちけめ、「妻俱し入道め。」と返答す。一老聞きて「言語に斷えたる惡言かな。妻俱し入道の仔細聞くべし。」といふ。五百人の所化この由を聞き、「あの箍師入道めを、年月日頃、憎し憎しと思ひつるに、斯かる惡言吐く事、大巖寺前代未聞の惡僧たり。一老に恐もなく、御

て災難を申し懸くる事、末代までも大巖寺を汚し、淨土一宗に疵を付くる事、悪逆無道その罪逃るべからず。只、石子詰にするに若かじ。」と、五百人の所化ども石を持寄りて庭に積み、已に清林を呵責せむとす。上人爲む方なく、清林を衣の袖の下へ隱し置き給へども、徒なる所化ども亂れ入りて、協ふべしとは見えざりけり。

上人思し召すやう、此の清林は口才辯舌世に越え、當意卽妙の氣轉坊主なれば、必ず「めぐし」の言ひわけあらむと、上人、清林を引連れ庭へ飛んで下り、「待て暫し、所化ども。雙方對決し、妻倶し入道の仔細を聞き、非に落つる所を以て科に行ふべし。」と宣ふ。五百人の所化共、此の義尤もと同じ、大庭へ出で

て雙方仔細を聞くに、一老申されけるは、「彼の清林めは伊勢の國度會の郡山岸と云ふ里にて生れたり。親をば彌五郎と云ひて、その里の桶の箍をかけて身命を送る。其の箍師の子なるが故に箍師の入道と言ひたり。扨、妻倶し入道の仔細聞くべし。」といふ。清林答へて、「尤も道理あり。さればこそ其の方が父は妻を倶して汝生れたり。その妻倶しの子なるが故妻倶し入道といふ。」といひければ、上人を始め五百人の所化、奇特凡慮に及ばぬ卽妙なる返答、世に越えたる氣轉坊主かなと感じ、一同にどつと笑ひて退散せり。

この清林、修行成就の後琴上人と申して、關東にて法幢を執り、智德靈驗にまします。今は京東山の黒谷に住み給へり。

(一)徳川家康。
(二)大阪府西成郡豐崎村を流るる長柄川の隄。長柄川は一名中津川とも云ひ淀川の一支流なり。
(三)秀吉の臣 攝津茨木二萬五千石を領す。(三二六—二五)

大御所(一)樣殊更御信敬あり、諸人渇仰の首を傾けずといふ事なし。當代浄土の名智識と聞えたり。(慶長見聞錄)

二六　長柄隄の訣別

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘(のこん)の星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、長柄隄(二)に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、ゆきて歸らぬ涙の音、狹霧にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとどまさるらむ。片桐市正且元(三)は、居城茨木へ立退かむと、從ふ郎黨一百餘人深更に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづしづと、長柄隄にさしかかる。(中略)

後には何か一思案寂然として駒たつる、長柄隄の有明がた

(四)如二月之恆一、如二日之昇一、如二南山之壽一、不レ騫不レ崩。(詩經)
(五)豐臣秀吉。
(六)清正。
(七)秀吉の妻。

塒に囀る小鳥の聲、川霧やうやう晴行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るる東(ひんがし)の空には似ぬや入りかたの、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄飄、見る目も昏し遠方に、おぼろおぼろとあらはるる、名に大阪の四衢・八街悄然として、さびしげに、一棟高く聳えしは、

市「おおあれこそはお天守ぢやなあ。南山(四)不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと、築かせられし大阪城、故殿下(五)かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離ればなれ、取分け加藤肥州(六)逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所(七)の御方さへ、當家を餘處に見そなはし、浮世はなれし御ありさま、脣齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城・湯池もその甲斐なく、

いひかけて聲くもらせ、

(一)秀忠の長女、慶長八年七月秀頼に嫁す。
(二)京都大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字ありて、家康より難題起れり。

市「須彌より重き御遺命、夢いささかも忘れざれど、御運の末か情なや。この且元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千(一)姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御眥にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに康かれと、祝ひし文字が元となり、降つて沸いたる難(二)題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かかる仕宜となつたること、御運の末とはいひながら、

こらへず馬より飛下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これしかしながら不肖且元、愚昧にして先見無く、姑息・因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかかり、仰せつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思しめさむ。それを思へば且元が、この腸はちぎるるばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らむ。お許しなされて下さりませ。

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れにけるが、ややあつて心付き、

(三)秀頼の生母淀君。

市「ああ我ながら不覺の至。わが大罪の御わびよりも、さしかかるお家の安危。長門守には如何にせし、心元なきことどもぢやなあ。

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成、

木「市正殿に候な。市「長門殿、待ちかねしぞ。

いふ間にかけ寄るくつわづら右手におりたち顏見あはせ、言葉はなくてそぞろにも、まづ袖ぬるる朝露や、風飄飄たる枯柳の枝、入りかたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長柄隄にとどむらむ。

木「もはや豐臣の御社稷も、いよいよ末となつたるか。「棟梁と賴む足下まで、佞人・讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御(三)母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。つづいて足下に御討手と、昨朝承

(一)織田信雄常眞入道。
(二)大野治長。
(三)渡邊尙。

り大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城內議論沸くが如く、(一)織田入道殿日ごろに似氣なく激論の末、席を蹴たて、只今退座ありしとばかり。後は亂脈・無法の評定、御母公の威を笠に被る、(二)大野・(三)渡邊等が我意・暴慢。この上は是非に及ばず、かれ等を一刀に斬つてすて、腹かつ切らむと、二度まで刀の柄に手はかけしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひ出して無念を忍び、寃を知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢申せしごとく、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜむ事治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿の、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城內の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せむは目前なり。この上は只ひとへに、籠城の計畫こそ肝要なれ。木「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市「されば今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛卒・勇士にも事かかねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。木「してその智謀の將とは。市「今(四)九度山に隱れ忍ぶ、信州上田、前の城主、眞田安房守が二男、左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ、智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。この事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切かの人に任せられよ。その他關が原の一亂以後、浪浪なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。御上使を以て招かせられなば、心を傾け馳參せむ。木「して又籠城となつたる曉、敵を防がむ手配りは。市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくては協ふまじと、前年紀州の山山より、材木あまた切りいださせ、商業の爲と僞り、紀州川の川上より、浪速津に

(四)紀伊國伊都郡高野山の北谷にあり。

押流させ、御船入に積置いたり。まつた港口の御庫には、年ごろ力めて購ひ置きたる、數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、尙支ふるに餘りあるべし。木「それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀近年御出費かさむと雖も、なほ若干の餘財あり。市「甲冑兵具も乏しからず。木「城は名に負ふ南山不落。市「眞田・後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば。木「たとひ關東の老奸雄(一)、利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、市「なかなか三年・四年がほどには、攻落さむこと難かるべし。木「まつた若年には候へども、いよいよ軍はじまりなば、われまた一方をうけたまはり、(二)速水・(三)御宿・(四)和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飜さむ白旗は祖先佐佐木が四つ目結、君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集まる關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配りせむ。御心安かれ市正殿。

(一)德川家康。
(二)速水守久。
(三)御宿正倫
(四)和久宗是。

市「ほほ賴母し、賴母し。唯大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照し、成行く末を鑑みれば、木「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野・渡邊。市「上、御發明にわたらせらるれど、木「讒佞これを蔽ふがゆゑ。市「地の利はあれども人の和なく、木「故太閤が御威武に、をののき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。木「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、市「有明の影うすれつつ、木「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、市「新日東天に昇るといふ。木「世の成行の、二人「影なるか。

是非もなき世の有樣と、入るかたの月詠め入り、しばしは愚癡にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのぼのと明けにけり。

（坪内逍遙――桐一葉）

修訂新撰國語讀本卷七終

大正三年十二月四日改訂再版印刷
大正三年十二月七日改訂再版發行
大正六年十月二十三日修訂印刷
大正六年十月二十八日修訂發行
大正七年一月十日修訂再版印刷
大正七年一月十四日修訂再版發行

修訂新撰國語讀本（全十冊）

定價	
卷一、二	各金參拾六錢
卷三、四	各金參拾壹錢
卷五より卷十まで	各金貳拾九錢

大正七年度臨時定價	
卷一、二	各金四拾壹錢
卷三、四	各金參拾六錢
卷五より卷十まで	各金參拾參錢

不許複製

著者　東京市小石川區大塚窪町八番地　佐々政一

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　株式會社明治書院　取締役社長　三樹一平

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

發行所　東京市神田區錦町一丁目　振替口座東京四九九一一番　株式會社明治書院　電話本局二三九八番

製本